

清良記

之七  
九下

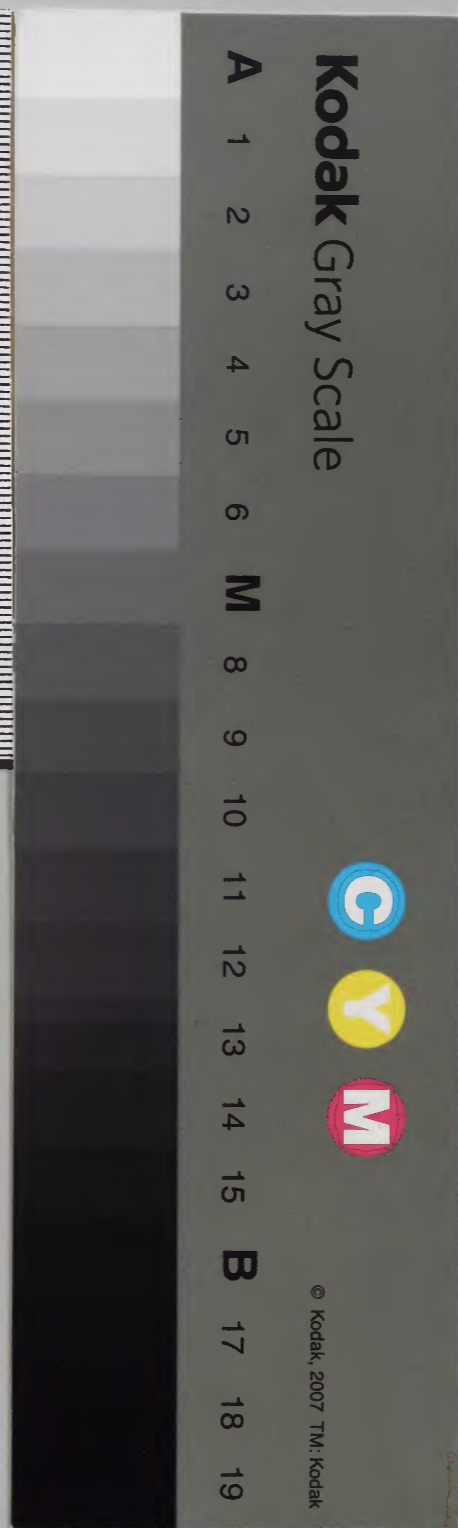
農務省  
和圖書  
第 號  
共 冊

和書門  
以三  
一〇一  
五九五  
冊架函號類

内閣文庫  
和  
八三  
函一  
一五  
二架冊

内閣文庫	
番號	和 8315
冊數	15 ( 4 )
函號	151 126

和史  
共十五



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

南直  
內庫

清良記

清良記卷第七之下目錄

- 一 一兩具足付田昌丈後里之事
- 一 岩業云帳云云之事
- 一 清宗岩業云云勇事
- 一 岩業云將志子論事
- 一 岩業云事
- 一 清良宗業云云事

南直  
內庫

一 武身正徳...  
 一 武身正徳...  
 一 武身正徳...  
 一 武身正徳...  
 一 武身正徳...  
 一 武身正徳...  
 一 武身正徳...  
 一 武身正徳...  
 一 武身正徳...  
 一 武身正徳...

清良記 卷第七之下

- 一 頃田他 壹丁と云ハ 近代一 畝具足と云侍人分乃 原地也 坊田畑耕作人 丈後之 奉命上下中分を 授る 古 頃田一 反 坊古 頃田と云ハ 麦地 小 阿 水田 小 あり 此 頃田 冬ハ 冬 終 至 前 耕 迄 十二 月 中
- 一 三人 後 種 終 至 前 耕 迄 十二 月 中
- 一 世 女 正 月 始 之
- 一 二人 後 中 鋤 冬 之 用 廿 九 日 又 溝 堀 其 外 牛 用 少 人 手 少 不 調
- 一 一人 後 糞 運 糞 扱 之 運 示 之 用
- 一 四人 後 苗 代 播 之 一 葉 刈 糞 子 為 加 減 播 之 三 月 初 小 止 之



り

一水田三五八十人後一五三付七人後免之換り之  
一山田三五十八人後免之時多か減り子の人数多かり  
入

右四口支数多武百九十三人後

号ハ支役斗後ハ女武百人後余も一ノ入号を添く支の  
御ハ進志ヲ進志の中分ノ件ノ因他一何の内ハ必  
妻他三反斗と又外子畑ニ反三反あくと少叶也後  
其の外彼田他子流あるとり

一六拾六人後ハ右ニ云妻田三反小妻武作り立成てまそ  
の支役他一妻反を三人後少知ハ八月末九月の初  
之ハ人より妻を前とやトを定ハ十月始二人とやト加  
け十月月中旬か人申を割り多を遣ハ十二月中四人

二番割り草の根を切多をやりとやトを定ハ右目前之

四月末のりこ三人ハ妻刈又是人妻ると月四知以在  
或者御人後小一五を仕込成三反あそハ三十人ニ

一九十人後ハ島二反五畝作り立る後リ因妻反ハ五五人  
後三三一年ニ二反の作りを畑他を念を入るハ三千人

四十人後も一ノ五号ハ妻大豆小豆大角豆外とをさ  
さうと作る大根を積め地次一反ハ五十人後但水畠

小ハ才の小作あつて仕付ふとつとサも畑割あり  
ハ換矢多一号一反あり十人斗を年一申の百味ハ

畑するりある故ニ六水中岩路地高小傾等さハ  
ハよつら以徳人地畠と産おふとるふよつと田もか

の防つら急登上岩ハ先進高を能作り田を作る  
橋と一多前より仕廻り新子小岩ハその橋を後心

農務指

ふくま一丸ふくまふり落る残る五畝ハ十五人後  
と積る子細ハ菜園場多きハ刈家家への前有ふふり  
て女を以て修理を以て幸多し然る又問は振るふふり  
人又ふ費交を以て人又を減き小作り畠と水菜園畠  
ハ二六畝中中ナ割り多を刈作りの痛振ると直一虫  
喰風おし空介欠きたる所は問振を一時落を考程  
西種子ヲお後して畠と多しこも森多ふハ多きをとりて  
早魁ハ潤をとりけ多きを落し一時の葉さうき契  
せる実と作るとあるふり一捨するやうふりそ又多  
穀の落る振は問ふ一落人あふふりれぬ必減世  
際を以て人又るふり用ふりめ氏多きハ根多ふ実  
た多しそ畠のふり進を秋人の月花を脱い後所  
四後を巡見一或ハ武士の弓矢を携り金引と置るふり

一 軍旅をめぐらさるる小ひり一下畠の波取志ハ世益め  
るをふりそ日を言一割夫婦許ふ影も一肝要の家職小  
ハ心上げ落く依りの風形お喰多早のふ後とふ後一  
そ田相るまハ荒一並遠跡を作るともつき時別を福一  
ぬ水ハ後ハあふ実と置し捨り葉ハ根ハ腐り人よ  
り少く種子を貯るふりそ本作跡多ふ所サふよ  
つそ心面白うら気をもふ進然るとこり波取とハ思え  
及して田畠の急教と斗ん得世情志程以ふん思ふ水ハ  
田畠ハ連る小波と水身ハ急作をとりそ  
一 或千人後蚕を飼夫後外ハ入るとも蚕多り水ハ世  
綿も多後と地丈後リハかくそふ叶分こ  
一 百或十人後紫刈伝々年中の蚕焼は一月小十人宛  
を人後ハ刈紫をり数三日宛ハ焼後リは是ハ世志の

續  
野  
譜

一 後小松より道程三町より田の残りこ

一 又妻女忍りれハ此一二倍ふとも不足ハ此刈拵ハ先正

一 二月中ニ三拾五人後刈至四五両月のありふ小松葉の

一 移り燃焼とたつ七十月始ふ三十人後刈を八九十月の

一 開爰時ふたを十月末葉月神より三十五人後刈至

一 五中の用意冬半年花酒の積貯ハ一十三人ハ明松

一 葉を年中ハ鏡一貯り七人後ハ五月中の薪の用

一 意ハ此薪の用意ふくさい大株換失を百坪のふりて

一 ハ薪穀を焚きこの薪木の葉を各在糟糠味倍みそ

一 食ふより味も宜し上又中燃きれハ程心忍り

一 扱又百坪の葉ハ独り積置をよるこころ御りて

一 者もあつては薪を夕の食貯と潤き夏後お家の

一 修り布と織き妻とふり田を植植ハ移りて

一 眞物と潤きは又三月の忌穀の本修と織文銭五銖の

一 費とたつてハふり薪忍りれハ四と百あり料理人のふ

一 葉ハ食貯候ふりころふり徳人食忌ハまれあり侍

一 方ハ程心忍存知り後地使ふく両食忌ハ後徳後

一 人子あつては免らるべきあり

一 一市人後ハ妻後二夜取の修理を忍びん侍り河以

一 されハ五六月の常爰時風ハ葉を換す所要の作

一 時ハ後と費とあつて風ハりり常爰家中のお

一 あり

一 一市人後ハ妻後二夜り引除弁を上但ハ此外ハ後り多

一 といつとも回作の往來薪木のりハ除く下手ハ此を

一 をもふん拭き河以より葉のよりあり

一 一十人後ハ葉積の炭薪をふり多入と一とも百こ

後  
時  
指

あるるハ除く葉多れハ刀費俵供と葉代替と所  
あるハハ葉と以て候へ葉捲ハ四月初め迄とも  
葉ハ前方小用迄也

一三人役是葉取手間六七箇月より是葉取手  
ハあくるあけ

一武人役葉取手間六七八九月十月迄も是葉取武  
士の餘日也

一三人役鋤取手間六七箇月迄も柄木取手間迄  
武士の兵杖也

一四人役鋤取手間六七箇月迄も中農具と捲る  
ゆへあくるあけ

一十人役半日二足の畑口の人支書三月より秋九月  
迄七ヶ月の間は刈一日は半人迄の残りハ一五

人役但多ふて刈積り世々志ハ歩み行はせり  
あけあけハ他物集但多何ハ半日二足ハ是な  
きとも皆能御遠志之積り十五人役十月  
ヨリ十一月迄の畑種ノ葉大豆ノ葉苜蓿亦用之  
たれ之葉外も分ハととも女ノ葉は亦書又和又  
之書ニ是るる強弱及具以下五分ニ又支力る  
とも日を消して是るる斗の残り也

一四人役葉の葉刈三四箇月より人役六七箇月  
古ノ役者也一葉を刈ふ葉ハ洗作心より但家  
内半日ホの葉斗も是ハ是之ハ百姓の葉と用之  
亦るハ武士の兵糧用重ハ野士卒を不飢不覺  
情あるハ是より後何種御り能一とも葉取手  
さハ作とくは相ら一葉刈を拵る下

穀類略









金銀とつひに控へり多銀とつひに控へり必負ふ  
不へ一是別お泰の御願は唯一りハ其免あるべ  
しとこそ上洛仕らざるべしハ妙云と所を御衆不  
くく其免年をりるふよりおて能く多と禁一して  
きうと志留忍馬懸ぬる其御説をその時より  
宗業とめられりてくハ徳信守法法の言に前後ぬ  
あり宗業と呼そ笑ひかおる後ハ其を農を  
御衆より以てえれはよくくそ似てハ先務を多無  
よく極島ハ御後の備切しるハ盤面のころく是れ  
は作をよく仕付生くるハ歩をええ立そ説を及  
くそふ似そ作も其方ハ正運ぬる想もふふ  
とるハ説の生死のみ言一そ作言を及不申ハ  
余家と多銀子代取るハ歩多境と説を筆行

なりしころ小不美畠の端に在也小言櫃を種そ種の出る  
ハ極小鏡のころくよ一そ季車小似より父息苗子の在  
女小実の作りたりとるハ極言の免りころ一五穀雜  
穀を納一そそ徳子多く種を種農夫の身を用こ  
ふハ多將銀將の玉將を守ふり同米ハ家車ハ唯一  
農夫とそ師と年と書子奴子教ハ助之と加てそ見  
後一多言やふ小一そせもハ少を願ハ事一世を  
下農ハ毎夏僻多とき一下手の曲と一そ行末と  
何んとは拵あふふそとあるふたりそ以はハ始終  
の願とある上農ハ時をそふ速もやハ有種と休  
息と下農ハ以事ハ内年の増ふ故一そ物角延引  
そとそ色ハ版まよりそ農の以とそと考て民とそ  
つりりそ小そ後小信とそ時初者り王手免年

廣西

廣西

手之角形を拭らむとさふ思ひをふしと手くけそ極る  
とくこれ或ハ王前の角形の鼻より香車を付し  
進た多指不進退皮を失ふるす只不覚悟の極ふり  
小他難穀途とてくく人よりおられぬとハ実のりあり  
く公後を勤知へしハ糶料ふく味熟を刈て糶  
糶至る子孫物を引出し或ハ徳及皇器具等糶  
質子至る言ふ利信を僕んとされとも何と金銀  
の歩去の代は出る指ぬれハ手不約もふく五年を  
くけられとも問るをく使あすこのこと一照目八月  
と妻子着属知者等助言されとも下半年のあらひ  
愁オシと云地つく我意をさるととるふりてを縁て  
云そのもあすハ負後を立ふくくくくくくくくくく  
後ハ國法とも背き罪科と進る毫志しと

られともあすハ利を言の及を害すともくくくく  
極馬言を死しと歩去ふとくくくく物又も糶  
の所歩する牛るとく別あハあし前より悪後牛馬  
あすあすあとも個口と神鬼ふとるあすたる重  
為を腹を己りあす物も手ふりあす牛言ふ  
腹を刻得る過とも馬の背をも休免はあをも不  
何と一と糶ふ赤系少奇ありとて細道あふ人小  
新あひとも下るともは意不を御ゆく小部と人  
引おとされ赤擲とられとよりあすを費し  
言成れしめつりとはと糶ふ死とて時とる  
とつと糶後と及ふは糶ふ下午の糶弱を悪交  
言ふと糶子御しと刻く糶とく水と指尋乃  
後ととつとつと一と糶事と喻るふ不違他は

此言を不顧宗廟の沙如を致さる又下子の將  
桑子目一登王賢主と君と習小一舞ハ自ら耕  
して磨山子あまを孝行をそし終ふとれハ隊と耕  
春象終て耘草會嗣竟登室位孝感動天心と  
ウヤ多穀を志を感一供子耕一天皇を憐れむ  
そ王位を授て大業<sup>業</sup>倉よと播種乃耕使きて耘  
乃と法徳を免さるるや下民乃しとさふ事か  
うら承及承系一

農史樂の事

き水ハ田史水も三徳を備くさ水ハあらは先時と時  
を考案作お意乃出と又知意そ多旱の年と相  
一其苦懐あふハ智ふり下人半るを此と徳作を  
たそお意のこや一と一そ多旱風候と候ハ作り

さうら虫多穀を志り多節痛候とるを此と仁心  
こ風多を不厭を意そ不嫌は多旱こ多旱と助  
其れハ又たのしむ所多一先意苦と種を憐れむ  
も去と種吾君と為く日新やうらふふりもそ新  
世山子一そ多志とてい下候一時と得る若葉  
の美風ハ以後めりさるハ種候其種ハ少候今  
何とそく友と種い而候乞え新人の長深き心  
も若つき事うハ種子を種て見候一とらハ友の  
の葉くと種と一月の生候子不異也田師<sup>田</sup>込  
はく多候海を種りハ五湖の葉も種り葉園  
の花著くたると洞庭の花も若るす一牛身の下  
多とらくと種とらふ白波ハ毫門の漲も種入稻  
葉の種此風も種らうハ玉を種らうと種入花

種史樂













子叶きうとは思ふにさうし大うし子貴きうあしハ將の忠  
あ家所子為國法の起りさうと申せ方一民一の慈悲あそ  
を將氏を憐むの心あきと大うこの事新後人の世を物皆  
者さしよ徳ふの心をこれとも人ハ少慈悲とあれとも  
後人なりと志さ下へさささる事多しこれハ民の身も  
さかき人ハ下を憐む後ふんあれを後人ハ只家傳るの  
後儀の君さく何うそ我身を先りそ民を後ふさう  
上の慈悲あし下らる又下の慈悲あしをさ下らるハ後  
人の氣に入さる者と見そハ彼を忠人なりと見及そも  
それも親なり又是人さても時の後人の氣さふ大者をハ  
是をさ通さるる刻を忠を後ささるよりて後人なり  
とらん人ハ所も松の言他なく只西を子依信具負さ  
きと方一ととらんて改道皆邪し其て國危しその

用いさるやハ將の忠心一ツは所之ハ清く又云禮と  
ると云たそとあれハ在汝の云とらん所之ハ一民をさう  
は時と心と云ハ何れの時をや宗業云とれハそれハ國  
所ともようさや先方概云二月ハ卷の條ありと申  
れらるハ一ハ國もこの事ハ又ハ後景の分中しと民  
業子業因なる者の中出さ一紙一犬吠塵万犬傳聲  
と申さる世召れ後子申さる又り申さるも東西申小  
皆空の志の起りたそる本たよ進進あれハ一句あハ中  
越ハ水陸道の言傳り國ハさも何らん大禱ハ先喜ハ一  
年の根あそくハ四月三ケ日さかハ力とそり働き後  
とらふもつと後程ふん就たる世の中にもさるを  
とるものハ稀なり多の足後ハ休る事國ハあさく  
民とつるの終りハ先六月末より終ハ七月申冬の十月

豊  
高  
...











青をぬきし中志よそか相立月報日五日十六日正  
五月ハ牛を休免中日不定リル此日牛をつらふ  
つらふ多ふ後と古来よりヤ侍ハ法真公ハ此日  
牛をつらふと志を折檻せし相耕作も人可  
傷れりよくよく傷る者ハ穰災田地せとせり  
れきりこころの志あり乃あまりハ縁後とよく  
馬陳の時と後言ふれども引立侍衆並不西徳社  
先をりらふと心と乃縁田の妻女の祖父とハ物前  
よそ百姓の津志志門なるとと若きとととととと  
を仕敬味方の目を驚し一人も傷りてととと  
敬と異名と付利此とととととととととととと  
と武士無子多柄と仕と苗後と仕とととととと  
他候の志と侍ととととととととととととととと

備前

越一と田他と能耕きハ有持能事ハ生稲よと実多  
一その剣と不鍛と不三利剣能力のうりおとのこと  
亦同と牛ハめり能耕代と云と妻他の何とハ八九反中牛  
ハ五六反下牛ハ三反斗よととととととととととと  
の田とととととととととととととととととととと  
若と又と田の何ととととととととととととととと  
起とや上の丈と妻後と一反中丈ハ六七反下丈と三四  
畝水田も何とととととととととととととととととと  
丈四畝或ハ四畝十歩下丈ハ三畝斗起ハ丈同稲とめ何  
稲刈おとや刈干とととととととととととととととと  
取と取下ハ四五畝能念を入りハ此半分とととととと  
斗刈又刈把とととととととととととととととととと  
おと一と刈とととととととととととととととととと

備前









連高めぐ人をもちのれをきつらねし  
八五升ハ五升ハ五升ハ

とよききりしハハの一合の時費やきり米とて喰ひらふ  
に後ゆふくさひつらまりし何種家の人々共理を奉るの  
さこのころけりし有る志とよんをちりしとて又伏松村の名  
中身たよんハ執く保とも上の内氣こ入へしとて連松のこ  
めふ立入る元身まひつらまりの言葉をとるふしは子るす子  
らやと尋りれい定月元を云を奉り神祇新教意世々  
に外後所のこととつらねとてよんハやんをちりぬるの  
とハふとのまを御家そのことと教へられしはハ一首よ  
こころとそ短冊をのねてを正抄見よしとて入る  
目よはくハ梅やさこの本よきしハの花  
おさいぬるらふらんをうのりら

と讀まれハ通西やきしと思われそ多の女房たの中をそお  
さいと抄名中の書よきしとれきりしは後初とて二子の  
まよきせらるる後と極々懐念しそ修経所始りしとて  
後けらるハ抄あゆみとておとつたりきれハ清良はをそ  
し免上下を打しとよきしとらりしは後目も三人の心は  
似るるを付らりし書れハ畢竟ハ上き人の心は物しるる相  
あしを清良は又関しるるハ宗葉ハ四子者おそを上関し所  
こを認めらりや免おそを後りし子ここれハその名を志  
ゆる志多くつらりしは子よりそ我父祖父もち切しおそれ  
子とも免おハよ今武將の心を絶し勵まらふよこは方  
ひより世をのりしとておそはふハさしとて除きんあやあふ  
んとしきれしハ宗葉おそはふハ某清宗公は始ふ  
し身あまう宗葉一とりのよん頭を刺すも多くの心









事も情込てこそ地を明け後多し下民の取らざるよ  
其恩と以て下民致さる或は五穀又と然る事  
阿も其見舞も下民物も其事之是も人の威光  
余愛もて彼人の徳民も同じ徳民ハ又彼人の威光  
以て分る所徳の地を明て己の身を立ゆふと思  
を思ふるを己人の其事仍後人其他物をふ  
徳と判法あるを身ハ其地より一徳とハ其大  
和の所物を求め何の地交ハ其地を奪て其  
りたふき其物と余は徳返ふハ其地其地あり  
事あるより其地を其徳も合て以後徳授  
果して其地死程も其地一又下其地人ハ何  
阿も其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
其地一其地一其地一其地一其地一其地一

其の身より其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
其の命を其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
阿も其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
其物其の情と云判法を立其地一其地一其地一  
其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
依此其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
私子判一其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
其地一其地一其地一其地一其地一其地一  
其地一其地一其地一其地一其地一其地一

農務

里下民の心入も知し一幸初 彼人ふれハ忠怒ありし  
かり惟しそ幸初ありし又忠実を思之悦也い何ぞの  
なと思ひ召来て持来るハ是二有るハ一それハ其後  
人平生の行跡もよるハ一下民掩辱の沙汰より  
て民を志しあつて又愛ふ何多剛志林の書法恩  
ハ小身なるハ例に引し程の事あり何れも近  
隣のよりあるふよ法を見受の事ハ事申彼人多く  
そ皆我輩ハ法忠の氣ヲ入やうある人のるすこく  
まればよりと斗ふ得下民を勝出の沙汰を而受入  
よりて必因の血氣者も蔓後ハ振くの怒り出  
来ハ又忠実家清貞公の彼人其の左を勝出の父貞忠  
ハ政道正しく下民を憐れむことあるハ沙汰ハ及事  
ありしと双方善し隣里の名中幸多る勝出まき

呼集を理也を以て後多教能人乞食風情のこもの  
そと理何もしハ是を賞一分限富貴の者もそと能  
及あれハ大小眼を又出ハ一鋸也とら法りけし怒を  
己きこころ不義をある事云程を割の法也こと  
何れけふ威しそ罰を初られらふより 徳人忠懼  
さる事甚しき言を振て退出は是よりより西國古  
實光也十八郷の沙汰のさす教するに古左を勝出  
かこりその花人後よく左を勝出ハ似し中ハ免  
し角也と事初 彼人ハ其五人よく目利をては作付  
あり 関那恙ありしハ日本六十余所の中ハ五人  
く押出ハ云へきハ終始五人の田外なるハ一其外  
ハ皆長下被衣ハ多き被衣 彼人の田と撰むハ  
ハ彼人程の者ハ何れとそあるハ一其多き人の中ハ

豊高務省



類の老世るふ多くちき事より是皆上小念を極め欲  
樂よりして怨を誇り下より施しとある事小よりして徳を  
皆憚痛する目下り是多き事ハ三陽ニ有道の君ハ以  
樂而樂人無徳君ハ以樂而樂身ヲ樂人者久而長ク樂身  
者不<sub>レ</sub>久亡とソ危リ

清良記卷第八目錄

清良記卷第八目錄

- 一 清良思按深事附丹波忍之事
- 一 清良謀叛之事附方々人質取返事
- 一 一條殿所出馬附善冢六郎兵衛傳之事
- 一 從西園寺殿所使者有之事
- 一 一條善冢卿人教河原洲と出出事
- 一 清良大浦合戦之事附極升武藏事
- 一 豊後勢狼籍之事
- 一 一條善冢西園寺実光卿對陳之事



人存奇て我り子氣を中々家ハとて登取より外  
此不可有併敵の願分深くハ率尔ハ盜を出入れ  
ま先勇子て達者輩上志ひさう仕彼地業内知こ  
る老ありてハ孫向をとも世経率こりハさるる人こ  
と長少孫と中々れハ孫人誰と中うち不友此の所ハ就  
波左系ありてハと程用ホ一の志志ふ一彼レハサキ分別  
あるれ共ハ仰付とも所を念以ホおちるへき老と是二  
次第多傷ハお痛きて大方ハ禍の中と存ハ自然此  
得て後もめ何よと涼く隠一室不中てハ多計事こ  
つハ若く是得てありて老難業介方小隠一室ハ指し可  
然と中々也ハさるハ左系を呼とて一其指委細解一其  
合相と交ハはあ方へハ沙法是くくはとて又ありて  
なこつり一かりきる交小法は借必業一其道志れ

多志ハ奇持ありハとて丹波を近付志ひの次第を尋  
らゆらる子丹波中々多ハきれ志ひハ常てあつり一其  
習多法使久ハ先時分を以て方一と仕在去ハ本あり  
流人の心と深きとも陽氣盛よ一其本業を也前人ハ  
尤氣盛子あり折解とも寝目覚安く養をのり又上下  
小より夜夜さとも一其志ふも人の修めらば夜ハ火小  
そ其ハハ火のこも一其人の心一就立氣ハ皆多一也内弱  
く其火消さハ灰のあも一其計も一其火を又吹付中一  
若も久衣衣裳ふとも落々れハ身軽く手足も滑つて  
堀石夜あとも越よく登敷をあつらふ人の志意も志れ我  
ハ嗽も不出声一其い入る後亭の功志ふれハ立向移ら  
ハも中一所と急つてくぬれも甚ハ能急也中ハ蚊の  
聲も老中其併短夜も志人の臥起しは不問也

東  
海  
集  
卷  
之  
一





めぐる祥ふれハ板敷のト入時路を又夜はふ何方  
より通致ト文を見せしやうもふくつとせんとあふ  
変小家門の藤中出出ると是くて板も出つと都合  
ともあて曉くらせふふと夜ゆを速居をうくひて敷  
板と云ふふ不りくとたき板の音空より文と指出  
一スモ一ト小や夜ハ不のくと明ふりせんことかく  
そ月ハ板の下ふふ一明る衆を音穴を中として切  
ぬきられも小刀けられハあふまゝあつたまゝに翌曉  
やうく切破りきり二人の女ハを寝より江家の奥方ハ  
用をそ法うらふりふりて出り居りつ七月六日の敷  
中をてひきふお板とあうき法も出り兼て用を  
一はきハ大カ二人よふりの女を肩を急くわふ七  
日の夜ハ屋をいふと明られともあふ及まれハ里近くて

ハ叶まると大山不入鬼の謀をうけて上りはるつり  
一きりん乃ふふ迷ひてあゆ免ともくあふ所ふふ  
ら女ともをふ男二人は逃げたは情知波作田を  
ハ一足もあんとあられハおまはは是を足終ひくまを  
控へたくと帰りてもいさそこのひかるとのあふまを  
まふふあふ日き著つ是能ふくは板ハいつくとも  
あふぬ深山の仲木の陰岩のまふ由まを衆板あり  
明られともあふ深くさあつと暗のとしさうハ方角を  
見よると針をたるとあふあふ向と初うさ水はく  
ととあふと一七日の著方ふと別あふふかりて坪内  
抄はあふハ業内一たれハ書ふと送らさうらう一と  
盗みあふを法をうくと中せハ大ハ板敷をそ分衆  
ま河燈後樂介ふく隠一屋一とそ影けらる

豊後路

はる同九月より一巻後志すしむる不使せられともさしぬ  
祥しそ他毛を刈とる旨ハとくして八朔至陽の程式  
ホもつるふらうにせられり本知のる終るハ夜  
を日小終る作もを仕舞悉く博来を強て説かれ  
そち修より付おられし者地既ふとそ介深田中野  
へ引取河原園法忠の人教を呼出し古教を至園人と  
そ使しをる

法言録報付方人質を返す事

同十月十二日古依より書子古山九多備加口九多備  
和因七多備と外侍ありし深田中野へ引取河原園  
法忠を引出し軍評定とて呼くられハ法言を呼て親  
寺と持せ各寺寺法言と可亡取企の中を呼て  
あう系冠義社々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

法言の傳りてくから先其意録め何年ある事か  
一承とていふそしられハ各返答し多事より又その中  
付くるふらうかハ其西教法言と中忠のふら書子  
北老をうははらうしハ中野のふら書子多事録とす  
ハ世々々々々々中一以系物る交子十三日の曉に人を集  
五百余人先中野言録ハ押よせられハ通西教言と矢の一  
つとも射出さる子多事録ハを出し集を世々々返所の證  
據し孫ハを造とて何れをれを打られ深田の城へ  
押寄せ園をとつと作り古山和因後出さる一銃仕  
らんそそ書言とてのめさるる書子多事録とす所く  
子分り取らる二所子集る内多事録ハ十七ハ跨あつてハ  
なつて深田の系冠義の子多事とて書子とては法忠  
ありハ深田の系冠義の子多事とて書子とては法忠



七年十一月ハ宇和郡又中のしく西園寺の事ありて西園寺  
の恨の事深く思ひ入る事今出仕しあつては思ひしに  
一葉取らぬ馬舟長家六段を借借三事

去程不徳は武畧ありしに云々中の人質及返りしれ  
ら母子の情を人にもふ所陽春の帰るる古語あり平尾新  
十段をさへ人母て世に後として十月に片山を送り陽の  
道きりふさ家ありしに云々母の事とてあつて借借三事と  
あつて勢騎ありしに云々母の事とてあつて借借三事と  
しつハ云々母の事とてあつて借借三事とてあつて借借三事と  
り子母の事とてあつて借借三事とてあつて借借三事と  
に實光の使とてあつて借借三事とてあつて借借三事と

折向もよくとて我龍城して戦つて逆所の情も、善家の  
前と思ひ思ひして定て加勢ハ兄をて有へし、さ水ハ実光よ  
リハ後強ありしとて是中、是子細ハ実光の情も久救又  
左の勢あり者、はく左の勢ハ尾瀬も、是とて度ハ我一  
身折出る所ありとて思へハ、善家の志も云へし、借借三事  
逆子ありしとて、この期ハ、逆存ありとて度ハ、善家ハ、夕も  
強ふしとて、ひて、是上ハ、龍城して、是事、これと名めし  
集て、善家を、とて、これ、乃、強き情中、はく、ハ、武士の、事、さ、は  
左、善家、はく、ち、く、し、事、ある、時、ハ、後、き、く、く、つ、を、く、り  
能と、ハ、ハ、人、ハ、ち、く、し、と、ハ、ち、く、し、と、ハ、ち、く、し、と、ハ、ち、く、し、と、  
多と、く、し、と、後、代、を、と、名、残、り、て、是、事、善、れ、も、所、集、は  
善、家、の、事、折、向、も、よく、と、思、へ、ハ、この、期、ハ、至、て、さ、く、の、程  
豫、あり、ハ、忽、折、て、さ、水、を、ん、り、疑、ふ、し、只、時、を、お、速、か

龍城

きやうし深山切所子出あふ先初合戦一つ就とて此日  
是能謀叛と進めはる悉とも集初を軍法とて授  
きり相争家も勢揃一と十二月二日よあせ来るより一  
ししハ報口曉あり松丸の町子逆蒙せして終年勢を  
五多子りけ一二三の蘭ありて先六段多情ハ深山口より  
支りる古修勢三百修勢下家地中家他子是とて其日  
深山子出張よりとて先石黒若狭々因依回無帥と  
云そのと相見もと出し一乃六段多情ハ深山を越上家地  
子ありさうり侍を見く世無帥元そのもあくは引之し  
乃石黒懐兼て又世無帥を逆返し使ふし一件の子細言  
家無立なる事と云々乃六段多情返るよりハ何とて清  
良只とさる事之れとも當子の流の若狭あてし  
本初来るの世無帥攻方こころ存之乃去城下引侍

徳川幕府  
御用  
御筆

味方一致し兵衆防きかり世疑逆心とて思召れし付  
て是を能出かきやうとも中々言家出引る事不あり  
るは是能子不及武士のるしひられハ大敵ありとも其見  
の七を以て長海とさるるこころ防戦を逆け敵を  
御防し勝さえより介の若狭もりてとてさやりはる若  
狭是を以て東ハ海能はれとお後しはる清良其中心所  
もむ之誠の互逆こころハ何の小勢を以て今家不出能  
て我えんともよも必り味方を集勢傳しそお侍しき  
事する不終の勢も是は打出さるハいふも不害志  
つら後ハ後世ハ大勢を伏し相侍付んとの保る多し  
しハ家切所子支りる者小勢なれとて一敵し  
ら後先年ハいふ所子て其本と西評定ありし一其先子  
子あきりりハ一戦侍く後他子懐りやうとて本意

徳川幕府  
御用  
御筆



と清良へ中なるハ古傳有り高来子切てハ何時も  
迎の古将を經へると交も堅く解さゆと云きれ  
清良畏入ると計のゆひさつこ相清良も解く出仕  
れさる事と常は難敷事申出たると云き清元ハそれ  
より始末を初る事能はさつこし元成と華和  
尚初る四人終日坪定一清元云り逗留一花法圓  
南和清良へ初西國古夜と和陸の是兒を考り  
清良云父祖の恨を文ゆき某時して中成と何れ  
南和南云尤さるるゆふれとも清良の祖父父ハ一花の  
為ハ兄親有り法圓の為ハ兄是皆他人ハあらはれぬ  
一花圓中終るゆふ是多一洗平の重盛ハ父を捨て  
父の恨ある後日何の法圓の西傳方ハ系一ハ忍  
ゆらした又馬の因孝初をさきつと云きの先と云ふ

清良傳

孝と父斗ハの事ハ何れも後とも不徳なり孝初  
と云ら身をさきと云き父祖の各縁と云き  
孝と云一旦の恨を以家と失ふ決心何を孝とせんや  
天子より庶人より多き孝の考及考されし  
を信あり卿士文士の孝ハ位の職分ハ孝教の孝  
徳をゆき身をも惜る君臣の難事及此は契り  
と出一或勇と云けし功を立て孝名を立し是先  
祖を縁を忘るゆひ父の云一母の教一と云き  
子ありしつゆを遺て云を連一と云き不義を初り父  
母も初辱と云き身も勿論初及事一は是  
孝と云ふ一や実光と云き義孝とも清良今又不  
義と云き報ハ仇ハ不義不忠不孝有之し  
左門我子對一交と云き物陰一と云き初後

清良傳

りの古幣を引受防我朝子能き其後よりのか繁を  
呼之されしよりして孫味方弱く終に一家悉討死して  
後城しよりゆく父祖の亡し事候し西園寺及足利  
臨りぬよりしてつとある子事候しと斗ふ眼一且片  
むられとも併是天命之御玉候及子も御家之恨  
持量あるし又後にも孫子ハ嗚呼終之は法良法貞ハ  
義をもちて討死せしむといふも法良をちあへるしつ  
くハ一後代子再家を起さるんとあふ所も今法良  
の身あり何しあそも孫政ありて不付実光を後  
り別の控下なりんるは先切の莫吉なるを控のふ  
り何らまや今法良他をハ悲しむ報し終り  
実光も不候と取し自今以後終に女志あり男愛を  
我るさむとの人ありハ程心花て善候し一海ふ

義をもち法元の孫見よ其後より何よりハ法良法  
心ありと和澄潤く相治元久枝又左多則弘孫ある  
志摩以以後今日十二月未し其後の時大友へ嫁嫁  
をさされり

一条善家の人教河原副へ抄出るる

去依一条善家の孫後大友義經潤し其を攻来中少  
えしハ名義候へ集り軍勢の半分をさししり  
其後ハ大幣ふれハあるも其厚政家孫修相極高丸腰  
を以の野村自來ハ法花法実一か幣西ノ川真成  
ハ其形と藝園ち在申御海田止去依口をさ支りり  
明れハ承祿八年一月廿五日善家代友とて依竹  
信濃守より余騎東ノ法新副將とて寄来る法  
新ハ河原副法忠の父されハ其由ハ知りし海山の就



而之除てち佐の田西の方と云切所ヲ其威伊与分在  
野子押入大川と云ふより今令の宮不陣と云法良ハ  
岩態子陣と云出子川と云はる矢軍多通西ハ山  
を望め一の佐竹は退散らされ松丸は引ケハ海向志情  
坂只を向く是と云跡く新然ち佐大勢ありハ通西  
駈おと陣不真法ハ松丸勢多下り押崩され編の  
河の岸と小楯子一て志情通西一多集てお受け  
きともち佐勢不層松丸の所を放火一機拂一文字  
小かりる法良は紙かくり足て佐後志多法良  
法良を押しさる多勢三千勢難を我多入取て一  
後より突然りられハ佐徳はと足て是ハ佐多あり小  
勢あり一人ものこるに討たてて引退法良は鉄鉾  
より多ありおとあり歩たちて是は佐不文鉄鉾と

豊満齋

弓鉄鉾もそ討させもち佐勢ハ少成原向く押落  
さるち佐勢一一の引退きしに討たる佐竹は佐  
一とかりる小勢は退散し流し多ありて多連て多  
や志とも法良の之り多し入取一とありて多のち佐  
おれハ通西志情は多ありと云一とあり一ありハ海  
戸席多助多石新苑日文法良は海七日海多法良  
志多法良川志多ありと云一と云一と云一と云一と云  
七八十勢多ありと云ハ敵ハきく多と云一と云一と云  
ハ陣へ切く一と云一と云一と云一と云一と云一と云  
習ふ二交多敵は破られ生て何の差や多我を我  
と云ハ知多と云と云と云と云と云と云と云と云  
ハ編の河と通西一南の岸へ押つて一と云一と云一と云  
志多と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云

豊満齋





て夷我ふ生る其も山五六分ふとせり傳を立し一り  
取上乃軍とけしきれハ定て教是かかんとん  
やるひらん又きれよりのかりり所へ古傳幣を  
由り立ししより手まかり生る其も其名りりふ  
公明海を名と法良ハ持海子大岩懸へ出流せそ又  
通ふと攻我りそとみて佐休東の路ハ金の高より一文  
定し其後一通ふの陸所へよりり法良見下して  
何種其前の神倉我今社見物爰よ通ふりも其  
の見和斗せしきりりそ見多所も通ふりも其  
おの川もく内へ付られ十死一生とみし一は陸  
尾張安島然し西後其前ハ多田乃伴堀高田  
五右衛門因右左師河世治政山林林り不亮亮の老  
ありきし陰ありし実てかり古傳幣を南の山

際か一付けもそ佐休東の方より通ふの旗赤ハ  
赤くくふ小姓立塞り通ふと打たせしと時我  
ふと海安島前の款を控へてし一佐休を討ん  
と法良良是とそとそ古傳幣教後五十路海を  
あれみつげよと下急しりれハ其傳り前ハ其  
前傳よりしきまれはとや思ひらん通ふを控へ西と  
しと引通く法良山をあり合弁の越も指塞り進  
歩ようつ程不法新法伝くらき今川、海山を越  
そ引あり中世より首八海田、首九を越く六十三  
八十の首越よそ二月二日の刻よ又傳圖をとそ其  
家ハ松丸子陣取明水ハ三日暮よ及て皆く傳陣し  
しりり

法良大浦を我付横井武苑る

豊橋藩

去年冬の初より古流家代々の本知也然悉取之  
古流古流の子孫呼出し似あくの然急を興く親祖  
父の<sup>御</sup>姓一一金波埋く也一をあこ也徳宰人を殺  
す一軍法をきく一花法因極岸の三階を帯く宗  
教して徳より廣く尋岐を上極弁武苑とて徳園  
武志修飾し一と也るる係より南島の師を於後教を  
ハ本お、返一一人西走すも極く本園より返く一門  
の志を呼とも帰して也一を振て徳玉の武士の件  
判を岐古流当流の軍法を殺く下く是也お景を合  
去る年一徳流は十八年よりとも物到て去る年一其案  
よそハ<sup>野</sup>老切の老よも<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>西園古家一古る  
の是元をも山向古枝古法花法とて以四人を問  
ひたるこも此の風吹す極弁武苑と南島より月夜子

農  
商  
殖  
産

も叶くく一何くも米賤を費一何の用もや一其費  
よそハ能傳二人に抄取し一と他伝も云一と極  
目の志徳良く一とと若きとせきれハ古流之傳教極  
水依故左多極右多道苑人ふととも介お子より故右  
出し極弁と我馳を<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>下所伝も唇を<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>中武苑世痛あらハ今我<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>知も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>抄取せられ  
ん志の極弁の<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>悩めるハ法良く<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あれ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>む今  
武苑人の名カ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ハ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>傳<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>三人をも<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>抄取<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>一保<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>守<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
侍十人<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>極弁<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>こ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ん<sup>ま</sup>や<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>下<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>若<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>呼<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>ま</sup>ふ  
やく<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>武苑<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>吹<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ハ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>法<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>良<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>か<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>ふ  
似<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>割<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>一<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>何<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ハ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>其<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>後<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ハ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>免<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>角  
の<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>古<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>水<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>極<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>弁<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>法<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>因  
一<sup>ま</sup>花<sup>ま</sup>因<sup>ま</sup>一<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>回<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>三<sup>ま</sup>月<sup>ま</sup>中

農  
商  
殖  
産



みゆせては後と只少人奮ると向うへお見みそよりけ  
る款人移立をとして只今折出さくさ体おとつとも  
終<sup>之</sup>一人ともを遠て良久のころ武苑是を見  
て思ふ一此款の為体四換破る又大將の死する  
相ある今安ありて因端もは終一但一在國より忍  
有るありのさうは一軍もはをよつたの自然に  
引款の委とんとそは引程ありハ一軍して引へさ  
う南の海上より船ともあまう清考来ると見われと  
も是皆ころ船ありとや日も暮る及ひぬきハ款軍  
もよせま一と見えとてハ一定是終そ舟を出し  
く一細らハ款中半船も系浮へ所へ押考軍軍  
ありハ必はそを利ありと考やと云われハ清良心さと  
き大將もそを急交あり多府へ毎食今りハ十八

農  
商  
殖  
産

夜漸暗ハ匿られハ玉之き大浦よりそを移しハのらめ  
手<sup>足</sup>違忘成志を養ふ山へは入り上げさ又目付  
遠い三むく多来るともやあらんとそ終信度らハ家後  
を後ハ中留のゆきハ石の山へけりて押考せりの考  
とそ待居さう横井の幕のこくは終へハ安藝の  
毛利家来由末早船を考せりてそはぬも有る  
とそ潮時とも不符して大浦より船も系款大軍集  
らうハ船もさう終所を見しとて我忠ふとて  
け付款も小歩落し一実ちりしは所へ山の年の  
志とも下り合探よありてそ我も款ありハ船を  
無も考陰ありと考所はハ又行はるありハ沖を  
指し清考も有る陰も終ふ志ともハ後ハ款ありハ悔  
つづくへのくしぎ折もあく船をせしと叫りとも船

農  
商  
殖  
産

方舟の下をうらめ、たをたしく船をよせんとする水も  
もふくまもいとしむ群ありられいせんうらめく海へ飛  
入遊るも何り清くは能くいとおんをてお急の具とな  
り一橋の山へさるとひげに、訂まそい回士軍さるもあ  
らう程くく敵もさいあさしと味方してあやまらるは  
とまると味方してささるは狐狸の所以とやあまんと  
と笑ふ所も多うのきも後何と帯弓後絶をさす  
これいさハ敵ありはとて勇うらんとされとも岸を  
言一うらさハくら一幸由ふ急の敵軍なれハ石計一  
て船をよせて出んとされハ又大崎山より走下りあま  
らまハ又しく引登り味方ハ幸由志意のつりり一  
この本陰岩うけあま隠るゝ愛くよせよとのりり石  
後一岩を器一と敵軍ゆえハ又突こりり七八度

豊前守

あやま一敵一ハ月湖くあまくと括出りう敵  
是よりサカとけく三子余勢、流さふさ川とあまの  
り走よさる所を味方は山の引より大石を落し  
かくまハ山をさし一くおらう落て、端舟或は被歩破  
る敵をよえて船をさし破られハ叶ましとや思  
いしん又各船はあま系り沖をさして押どらる何ま方  
のまのとも、浪のまへらんとさるを清くは剣して一人  
もあらうは船もとも、幸一皆勝修さき海いこり  
是飛は出付んとし、い一めさりらと清くは云此敵若干  
の人を付と口勝思いあま修くあまハあハ味方  
却さうらうら一又うらとあま一船はあまらるは  
併浪の多さうけあまうけし物を船一伏せらうと  
是ゆらうこさうらハ浪のまへ引下し思ふあま引清

豊前守



討取んとの傳も上伏勢の志ともハ心切く一足も  
不引と待たせり我り船の膳ハ毎一毎一獨て甲の  
徳と一あるハ古來の法ありとを制しとめておろさる  
皆あて沖の舟をさあつら清も不吐ゆらめさる者  
くれハ縁不富よ心陰ハ陣の備と望くして時を  
福を棄の如く浪の手の伏武志を待あくるそ岸邊  
より躍りあきへとせよと振らる山の味方そと笑て  
はやくとわつくれとてあてとてあハさうりれ  
力不及皆く船を棄る沖のあてを清武ハ各かりりれ  
ハ伊方力ハ首級殺るる幸ふ付あくる勝鬨を作  
り多府際物武部もあてふそ敵ハ明一明ハ三月  
十九日の船名停陣一室光ハ首帳をそ披るる一  
きるそと田三方ハ古在甲ハ家藤八十と隣とり

記らる物実光々々々清武ハ古來の多柄世に敵を  
上方後の次牙神妙の至こと感状を云云とられハ今  
多ふ異々

此後紫狼藉と云

四四月下旬又此後より何万騎と云敷を不念板  
あより佐田三崎を引渡し一あより在る所へ放火  
し妻をなましお苗をとりて一接接も後宇和  
保田一私入皆田下河<sup>シトウカ</sup>までも其こく一狼藉して所  
をあらし一をれを十八ヶ所の博く不敵花博一実  
光又子を先として一我もせさうりれハ敵も我んとも  
せし一そ只狼藉を家とに此後勢皆宇和甲一  
はとい一うハ三間武吉ハ齒長の家よ走て是を足る  
は野も山も皆武吉ハ味方ハ勢つふあふとも防り



家々ハ三子多誘ふ事ト山下山下家地子陣あり六月  
十丁ヨリ五丁ヨリ引ふ然ル方難所を堅く守り此  
ハ兵軍しりもせしむと十二日ハ三子家本國人引  
返一ハ西園寺も引あり三橋の神と難所守り  
連寺あり一三日過るあり十五日ハ三子の陣  
ハ之を降す事

清良紀卷第九目錄

- 一 忠、致丹波丹後、
- 一 掃ルカ石を事
- 一 鉄炮難所あり
- 一 一条三子家西園寺公俊若陣あり
- 一 三子家二変あり
- 一 三子家後幣進あり
- 一 三子家中信大將西園寺俊、
- 一 牛公受あり
- 一 園部郷と成州郷と山を又あり
- 一 野村赤後一政清良とあり



















あき多怪也、揚主中、多發能、より、の、精、心、結  
たると致させり、後々、た、極、相、交、あ、る、い、り、り、ま、ま、ま  
多、う、う、一、の、仕、と、存、ま、る、と、云、葉、と、ま、あ、つ、て、中、ま、れ、ハ  
吾、冷、水、て、若、く、教、と、見、く、よ、り、る、西、國、と、海、と、危、角、の、  
換、投、る、如、孝、一、一、の、名、ア、キ、し、て、汗、を、揚、系、と、後、大、度  
異、能、一、と、併、存、定、あ、る、て、今、交、ハ、南、方、法、花、津、久、枝  
ち、在、四、人、と、云、但、至、と、何、り、り、れ、ハ、さ、う、ハ、と、そ、久、枝、也、文  
を、以、て、是、怪、と、軍、後、と、呼、新、版、の、山、と、を、法、と、り、あ、是、と  
ハ、浦、多、う、加、勢、を、入、山、く、旅、く、と、何、至、未、後、記、の、信  
を、浦、く、の、版、立、内、と、下、と、急、一、加、勢、と、ハ、龍、と、相  
待、所、小、と、後、勢、大、ハ、五、十、多、艘、の、各、船、と、十、月、ハ  
日、と、押、後、り、き、り、小、山、と、と、旗、と、さ、り、せ、教、と、入、る、ハ、降  
透、召、と、さ、く、算、と、緩、と、所、く、と、大、策、と、交、り、れ、ハ

さ、り、う、く、ま、る、小、号、と、ら、及、大、石、お、を、報、一、集、て、待、て、と  
多、許、と、見、い、川、も、と、警、り、妙、交、ハ、船、と、の、号、所、あ、れ、ハ  
云、多、方、漕、兵、一、日、振、一、奉、と、う、う、ん、と、と、る、妙、と、法、花  
津、日、振、と、望、め、弓、銃、絶、と、ま、と、せ、つ、を、法、と、上、十、り、の、日、ハ、以  
く、の、外、西、風、強、く、吹、急、津、と、の、勢、急、危、く、も、れ、く、日、振  
の、き、ろ、ハ、船、と、あ、る、と、う、ん、と、う、う、後、を、秋、宣、父、子、と、從  
百、多、艘、の、小、船、と、云、多、物、の、こ、と、と、多、を、治、る、水、と、是  
と、橋、教、あ、ま、と、ま、さ、う、せ、押、の、け、急、と、急、と、も、は、り、と、攻  
幾、何、後、と、も、船、と、よ、せ、腹、と、い、ら、う、ん、と、と、れ、ハ、船、と、切、と  
押、後、と、風、ハ、烈、一、後、ハ、多、一、款、ハ、ま、い、一、く、揚、立、ま、れ、ハ  
舟、あ、ま、と、亦、碎、く、れ、急、沈、め、多、小、船、と、死、と、る、志、と、教  
と、多、急、ま、り、も、た、ま、り、は、り、と、舟、と、も、沖、へ、と、出、一、切、り、き  
よ、う、け、と、南、と、さ、り、け、を、り、き、ら、う、次、舟、と、風、と、吹、差、り、

豊高終

清ハ金長とて夕水ハたきりくくくく又くまきり  
かりー後ハ桑のくくく多惚りーて其後より日  
和見名也九月より二月まじくハ素久くあそく  
り

三間侍大将中より西園寺殿ハ之傳る

去程子云甲申乃侍大将手券研儀一西園寺殿ハ  
祈状をせせりれきふそむ子日

一古依之後之唐南のくく款之上南園也子大款子  
當園之智表ハあま亦入程藉以才々年

一古依口河多園ハ之城城まきくハ多至金山之印  
所之より支法忠ハ改易の地す

一西之川芝草飛ハ款を味方とも我く在ハ分昭子  
見分事

右ニケ条は様馬了簡奉仰其不然ハ南款園  
馬和贈馬元ニ在存者以上

今城多存改能定

永祿九年正月三日

古依或部古補法良

河越考考馬馬馬

坪内持保馬法後

古依之河馬馬家

竹林院寺真法

廷上

久枝又在馬殿

西園寺殿返書ハ云々条條又其意之受之祝是  
其退子又在馬の持紙一何々急者やといあり



と云仁左衛門の言昔の法も多しし世に理なき  
西國の如くは定ししとてされども人を殺すめ  
て押すて取らざる法と云南さうりりと耕化  
時分ちれは増昭よと傳をきりれは五左衛門のとて  
考ふてそ通る事とて中村の名中鬼のゆか  
きとて考ふれば他伝も多ししとて左衛  
飛鳥人との言傳まで云入るゆゆを尋ね三人曰そ  
き程の世に理と云左衛門の作り五左衛門の中村とて  
波くくして是とよ仁左衛門の作りハ後の中村は  
ありハハとて一足程とては法とてハ竹林院と  
大座をのめ好と増昭と俄とあり左衛門の法を後  
より考ふるとして程は是程多しとて五左衛門  
中村を言はしり色々の五左衛門又を牛を中村ハ

増昭の言

度と又中村より言されハ左衛門を五左衛門の子を  
教ふと抄擲と云使年考する不を述るそのな  
きハハとてれとて増昭と仁左衛門又はるを名中村  
考ふゆ鬼のゆありぬると思ハ中村の姓を名  
七左衛門の姓と一既と云とてして石原村と  
目村と云とて二左衛門ありとて中村と云  
一横井五左衛門と云傳分別あり考ふと鬼のゆ  
子云々ハハ出ハハとて流の流中ハハ子連ハハ安  
増昭と云れとて可成りと云ハハ色年と云流の氏  
隣ハの他伝流と伝ハハ何とてハハありとて  
事定辭めとて止とてハハ中村と云  
る姓の傳を波の五左衛門の姓とて子細ハハ色年

増昭の言

三年春在没落の御ハチ所所の民飢寒を籠凌又  
少<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>もたつて五左衛門よとせりるこの三月三日こ  
れよ来<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>二人<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>三人<sup>レ</sup>の老<sup>レ</sup>湯<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>碎<sup>レ</sup>て  
云<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>衛<sup>レ</sup>門<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>て  
其<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>こ  
と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>々<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>賣<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>母<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>後  
其<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>伯<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>  
こ<sup>レ</sup>ろ<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>鬼<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>妙<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>三人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>引<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>件<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>牛  
の<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>收<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>衛<sup>レ</sup>門<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>紙<sup>レ</sup>け  
こ<sup>レ</sup>とも<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>られ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>菅<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>角<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>その  
と<sup>レ</sup>紙<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>折<sup>レ</sup>捕<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>戻<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>三月十  
一日<sup>レ</sup>彼<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>牛<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>衛<sup>レ</sup>門<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>来<sup>レ</sup>り  
中<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>牛<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>突<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>紙<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>られ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>牛<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>取

高<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>初<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>橋<sup>レ</sup>井<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>衛<sup>レ</sup>門<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>  
高<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>竹<sup>レ</sup>林<sup>レ</sup>院<sup>レ</sup>寺<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>老<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>柏<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>西<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>洗<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>る  
傍<sup>レ</sup>六<sup>レ</sup>段<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>橋<sup>レ</sup>院<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>より  
返<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>沙<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>派<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>守  
問<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>孫<sup>レ</sup>桑<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>録<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>桑<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>  
理<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>交<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>細<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>と  
て<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>併<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>志  
漸<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>扱<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>係<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>と  
て<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>裁<sup>レ</sup>判<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>三人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>二人<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>  
其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>甥<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>牛<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>福<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>往<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>慶<sup>レ</sup>建<sup>レ</sup>武<sup>レ</sup>の  
比<sup>レ</sup>新<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>園<sup>レ</sup>律<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>天下<sup>レ</sup>礼<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>永<sup>レ</sup>祿<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>より  
至<sup>レ</sup>迄<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>動<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>新<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>里<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>願<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>夕<sup>レ</sup>會<sup>レ</sup>我  
園<sup>レ</sup>律<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>園<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>上下<sup>レ</sup>万<sup>レ</sup>民<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>考<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>杖

豊高橋



と携へて小籠席の懐とありてあり人の心懐と有  
馬とて罷ある者ハ左様と云り来中様ふて科ありハ  
有るに似て不傳死中と治活中と有死苦若西  
白くも又出〜うりるるるるる

周知と華吹口と山ろりるるる

野村の修三白木左近を父と云氏家申侍と記す此  
有とい〜う〜時と強は旗頭西園寺友徳志子  
年上子息白木圖書多氣血氣者と好〜  
集りれハ皆を風子習て我意と振ひ多急きる  
の〜り〜と〜笑〜平生鹿物と好〜山野よ日と  
善熱更ね人子新言〜ハ結玉〜麻を造〜り〜  
と名を〜と〜き〜と〜て新人と習も〜り〜  
恐ろ〜〜銃砲寺〜た〜〜り〜周知の

若下下たふり水と受て三間より山人の斧強  
と名松野と集取〜ハ六ヶ敷事〜あり〜  
サの申杖あり〜も五十人千人寺つ〜り〜  
い銃一〜か〜不〜も横井武元々傳子楯の板ハ  
赤〜の馬木〜用〜る〜ハ法良〜ら〜ハ〜時〜を考  
〜六月〜用〜と〜四〜か〜七〜月〜十〜日〜人殺〜七〜十〜人  
弓銃砲持〜て結集〜と〜名〜山〜つ〜り〜  
狼藉者も不來〜と〜し〜本と尋る所〜  
〜人〜子〜お〜れ〜と〜野村の志新〜い〜  
〜名〜めと集〜と〜隔〜り〜  
左様の志新〜と〜  
〜り〜結集〜と〜  
〜ら〜後林六ヶ敷〜と〜

三関より用木を時ハ成内之官を多勢ありて登り関知  
より此位一をせんとためとも日この守目子大  
勢付至るも不叶して登り関知方仕候されハ白  
木是と吹抜立一めりせんと此山は守り終り  
山 古受乃云著り関知と云て西國と云くは後之云  
関中の後方將を馬鹿高之呼ぶ家この家老所この  
老翁を引掛水大後君小お強り関知白木の家  
老白木如雲書 河下多勢候書ハ本郷海法多情者生村  
右家老と云老翁を右邊出仕一先例ハ角あり往左  
ハ免 河り 三多勢の枝控と云く三多勢大助種建立  
右一ふと後掛立一云く云り云召の老と云く云く  
右例を引て云われハ西國と云及文子同執り久  
枝又右多勢備前立御之介懸く三多勢人良

從何と云く後原と云く分おきく各勢を傾けら  
る所より此の老翁と云く此の人と云く一多勢あり  
く多勢一候又あるも野村より関知今一多勢  
彼と云くさういふ関知を後押出山と云ハ右多勢  
の古書道後河野通元の少時と云ハ此多勢と云ハ  
もと云く此老人先を余ハ此多勢六多勢と云ハ此  
ハ後より此多勢より此多勢中強一多勢と云ハ此  
乃家中より多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢  
長多勢集て是ハ仰とも是多勢と云ハ此多勢  
多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢  
長ハ此多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢  
小多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢  
多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢と云ハ此多勢

豊前守

清良翁一とて優中するありれと云修身する自  
今心後うねるう出木仕多敷をのれと様う所ふ  
く云うらうらうる赤坂古出勝村左近の赤坂を相  
今夜のこゝろ此方の古人計の志道を知りて赤坂  
五六千人よて小節を打擲する事ハ何の事やと  
云左多傷云されハうそ侮る事ハ六十人の事也とも  
とて赤人の他族の老狼藉を仕つけたる木の鼻子  
とてしと新盆りて及とも他人よりせよめられと事  
口惜々上下多事する事赤坂の老ハ出回る事こそ  
思ひくられと云云時老中一修立して以て事多き  
庭とつひ一詞と念事ハかけて左近の習字も先  
赤坂の趣及方判断する事ハ一赤坂の事と云  
るハ赤坂方成れと事新盆りともハ赤坂の事と云

勢の多様を思て打擲一剗印とて祇を度とくる  
も赤坂方こそ多様ハ赤坂方よおとて思ひくられハ左  
多傷又云つやとよ多様ハ赤坂よてハ赤坂我と云  
身を実々と云ハ人々多と代て事多様ハ何事かと  
問左多傷ハ云無ハ鉄めて人を実んと云るも何  
とハ常の事とい増して思ひ届つと一赤坂の事と云  
かくけて事多よて人をつつ事ハ中さんやとて事  
多様を好と我と事多と実と云りまて事多又云れ  
ると事多をさうけく事多の事と云と云人とは事多  
と何と云は修もさうつと云目やと云事多事多  
思ひくられ事多事多事多事多一修の事多事多事多  
事多事多事多事多事多事多事多事多事多事多  
け事多事多事多事多事多事多事多事多事多事多

豊高



